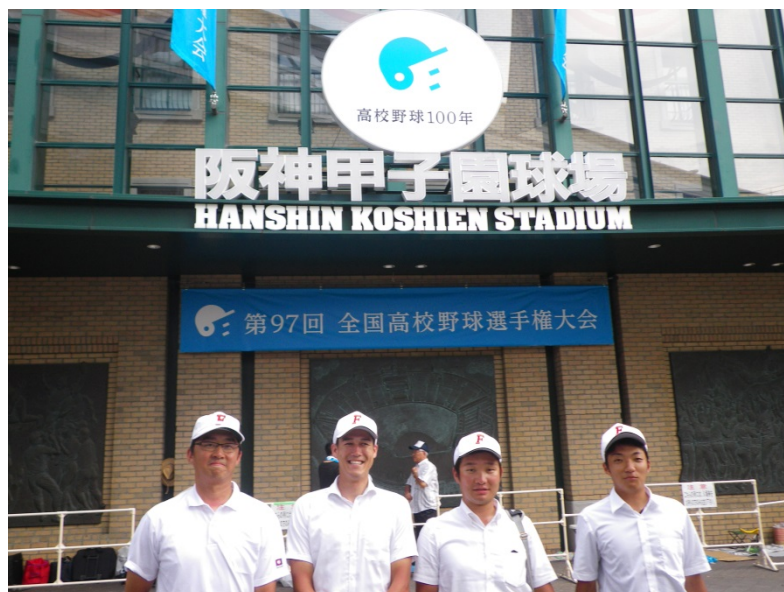


## 平成 27 年度 甲子園指導者研修 報告



### 1. 期 間

平成 23 年 8 月 8 日 (月) ~ 10 日 (水) — 2 泊 3 日 —

### 2. 場 所

阪神甲子園球場 (兵庫県西宮市)

### 3. 宿 舎

アパヴィラホテル (大阪府中央区農人橋 1 丁目)

### 4. 内 容

9 日 試合視察

滝川二 — 中越  
明豊 — 仙台育英

10 日 試合視察

健大高崎 — 寒川  
岡山学芸館 — 鳥羽  
龍谷 — 秋田商業

球場施設・設備見学

11 日 試合視察

鳥取城北 — 鶴岡東  
関東一 — 高岡商業

### 5. 参加者

松田 圭介 (北信支部 長野工業)	栗原 和馬 (東信支部 蓼科)
小林 勝男 (南信支部 阿智)	春原ケンジ (中信支部 大町)
巢山 尚人 (連盟監事 松本県ヶ丘)	寺澤 誠一 (責任者 松本蟻ヶ崎)

## 熱く暑い甲子園

長野県高等学校野球連盟

監事 巢山 尚人

8月9日より久しぶりの甲子園球場に行つてまいりました。球場内に立ちこめる相変わらずの熱気に迎えられ、若手指導者4名と引率2名の6名での2泊3日の研修が始まりました。この研修に際しては、日本高野連、朝日新聞社のご厚意により、特別な入場証を発行していただき、通常では出入りできないエリアを動くことができ、試合後のマスコミによるインタビューの様子や理学療法士によるクーリングダウンの様子も見ることが出来ます。連盟の役員以外はなかなか入ることができないところであり、こうした機会があれば積極的に参加してほしいと思います。

今回の研修は試合観戦を主としましたが、2日目には試合終了後、日本高野連井本事業課長の案内で球場内施設の見学をさせていただき、室内練習場やグラウンド内、ベンチ内も入らせていただきました。また、室内練習場でのアップの様子をお聞きし、普段とは全く違う条件で試合に臨まねばならないことなどを改めて感じました。また、本部役員として大会運営にあたっておられた本県の小林善一前会長ともお話しする機会があり、「甲子園では短い距離のキャッチボールで肩を作れるようにしておかないと投手は厳しい。普段からそうした状況も考えておくべき。」というようなお話も伺いました。こうしたことを多くの指導者に知っていただくことも重要ではないかと感じました。

日本高野連の本部委員については、本県の奈良井宏美氏が長きにわたり勤められ、多くの出場校がお世話になりました。基本的には本県出場校の球場入りから球場退出まで帯同していただけるため、とてもありがたい存在となります。奈良井氏退任後、しばらく本県出身の本部委員がいませんでしたが、今後しばらくは小林善一本部委員が本県出場校をお世話してくれるものと思っております。また、小林本部委員からは他都道府県の球児に帯同する中から感じられたことや本県の野球で改善すべき点などの貴重なご意見を頂けるもの考えてもおります。

甲子園のお客さんは目が肥えています。好プレーが出たときの地鳴りのような歓声は鳥肌が立つほどであり、ホームランはもちろんですが、スクイズ成功の際の歓声は特別なものがあるように感じました。この作戦の難しさをお客さんも共有しているからなのかもしれません。

最後に、今回は本県代表校の試合を観戦することはできませんでしたが、これまで何度か観戦した中で実感したことを書いてこの文章を締めたいと思います。甲子園のアルプスから「信濃の国」が流れ始めるといろいろな席から歌声が聞こえてきます。その多くの方たちは長野県出身であろうかと思われまふ。そんな郷土愛に溢れたお客さんの前でプレーできることはなんと素晴らしいことでしょうか。甲子園で「信濃の国」を歌う。そんなところにも熱く暑い甲子園の魅力があります。

## 甲子園研修報告

長野工業高校 松田 圭介

8月に3日間の甲子園研修に行かせていただきました。非常に暑い中でしたが、どのチームも集中力が切れることなく熱戦をくりひろげていました。100周年という節目の大会を見学させていただいたことに感謝したいと思います。

さて、甲子園での研修の中で選手の技術や体の強さはもちろん、観客数や応援もケタ違いのすごさがありました。その中でも面白かったところを取り上げて報告したいと思います。

### 1 行動のはやさ

甲子園について、驚いたことが行動のはやさでした。特に試合終了から次の試合までの時間が、まさに「あっという間」でした。それは、全てが同時に行われていき、無駄がないことだと思います。選手のアップが終わっていることはとうぜんですが、キャッチボールと内野の整備が同時進行で行われ、シートノックとファールゾーンの整備が同時に行われていました。整備の人が危ないのかと思いましたが、そこは甲子園に出場する選手の技術力でカバーされているのだと感じました。

また、グラウンド整備が非常に早く感じました。特に試合途中の整備ではトンボの押しがけだけで整備ができていることが素晴らしかったです。これは、試合終了後の整備を見ていた際に教えていただいたのですが、毎日グラウンドを固めているそうです。よくしまった黒土のグラウンドになると、スパイクの跡がきれいになおるそうです。県立高校で毎日固めることは困難ですが、甲子園のグラウンドの硬さに近づけることも必要だと思いました。

前日からの準備、試合前からの準備、個人の役割分担が徹底していないと、このはやさについていけないと思います。甲子園で力を発揮するには行動のはやさが必要だと思いました。

### 2 熱中症対策

連日の猛暑の中で行われる甲子園で最も気をつけなくてはならないことが熱中症ということでした。甲子園の1塁側室内練習場へ入れていただきましたが、そこは空調がきいていて、試合前に選手がバテないよう配慮されているそうです。ただ、涼しい環境から40度近いグラウンドへ急に出ると、体力の消耗がはげしいため、出場校によっては空調を止めて準備するそうです。



また、ベンチ内にはスポットクーラーが常設してあり、熱中症への対策を徹底してありました。そして、素晴らしいと思ったのが、室内練習とベンチ内にウォーターサーバーが設置してあったことです。これは、甲子園に出場するような学校ではなく、小人数の学校には非常にありがたいことだと思います。甲子園ではさらに専用のコップとお盆があり、ベンチ内で配りやすいように配慮されているそうです。ただ、急がせるだけでなく、選手の体調にも配慮が行き届いていることがすばらしいと思いました。

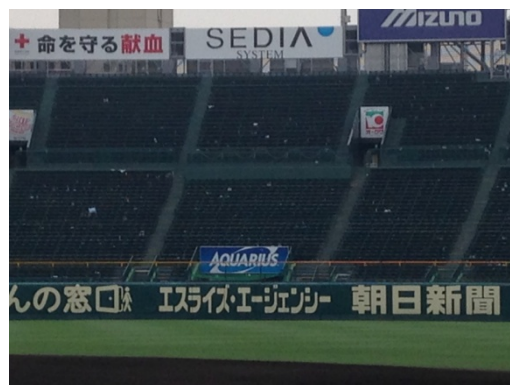


### 3 まとめ

私は今回、責任教師という立場で甲子園研修に参加させていただいたが、一番感じたことは、選手への配慮が行き届いているということである。それは、球場への誘導や入り方、グラウンド整備や熱中症対策、または観客との対応やセキュリティの徹底も素晴らしいと思った。野球に対する環境整備も責任教師の仕事として気をつけていかなくてはならないと思いました。そうした環境の中で選手は野球だけに集中することができ、自分の能力を最大限に引き出すことができると思いました。この環境こそが甲子園であり、高校野球の聖地なんだと思いました。

### 4 その他

試合終了後に外野スタンドにはたくさんのゴミが置き去りにされていました。素晴らしい甲子園を見た後だったためにショックは大きかったです。高校野球ファンとして球場を大切にしなければならぬと感じました。



# 平成27年度甲子園指導者研修報告

蓼科高等学校 栗原和馬

甲子園 100 年という歴史的な年に指導者研修という機会をいただき、8/9(日)~8/11(火)の3日間、貴重な体験をすることができた。

## 1. 観戦試合

8/9 (日)

中越 3-4× 滝川第二、仙台育英 12-1 明豊

8/10 (月)

健大高崎 10-4 寒川、岡山学芸館 1-7 鳥羽、龍谷 1-3 秋田商業

8/11 (火)

鶴岡東 9-6 鳥取城北、高岡商業 10-12 関東一

以上の7試合を観戦した中で、とくに印象深い2試合についてまとめた。

## 2. 観戦内容

### ① 滝川第二 4×-3 中越

滝川第二が先発全員の15安打、中越も13安打の競り合いを制し、4-3で9回サヨナラ勝ちの試合。滝川第二は15安打を打ったものの、2点は内野ゴロと犠飛によるもので、互いに堅い守りで要所を抑え、両校合わせて28安打の打ち合いだったが、ロースコアの試合になった。この試合では、6回裏の滝川第二の攻撃中、主力でセカンドを守る山根選手が送球を近距離で顔面に受け退場し、その代わりに出場した山根選手が印象的だった。思わぬ形で、甲子園デビューを果たすことになった山根選手は、正直観戦していても緊張感が伝わる程で、案の定攻撃ではバント失敗、守備でもエラーこそはなかったものの、どこかざこちない感じだった。しかし、やはり甲子園に出るチームの控え選手であり、プレーの中で落ちつきを取り戻してきた。そして、最終回の一死二塁の場面で初球を狙い、チャンスを広げるヒットを放ち、後続のサヨナラ勝ちに繋がった。

甲子園では、山根選手のように二桁の背番号の選手の活躍も目立ち、レギュラー選手とほとんど差がないのはもちろん、いつどの場面でも出場できるような完璧な準備をしているということを強く感じた。また、甲子園という舞台は、そんな彼らの完璧な準備をもって普段通りプレーできない程の緊張感やプレッシャーがあることを実感した。

## ② 秋田商業 3-1 龍谷

秋田商が成田(翔)選手が 16 三振を奪う好投で勝利した試合だが、この試合では、それ以上に秋田商業は監督の采配、龍谷はバッテリーの配球においてそれぞれ 2 つずつ印象的な場面があり、考察した。

### 【 秋田商業 】

#### 5 回表、1 点リードでの守備

無死二塁のピンチで 1 回目のタイムを取るが、タイムリーを打たれ同点。なおも無死一塁で、すかさず 2 回目のタイムを取る。その後、バント失敗、三振、中直で抑える。

#### 6 回裏、1-1 の同点での攻撃

二死満塁で左打者の成田(和)選手が初球を空振りした後に、右打者の高嶋選手を代打に送るが、三振に終わる。

#### <考察>

5 回表では、1 点リードを守りたい場面で 1 回目のタイムを取るが、同点とされてしまう。中盤ではあるが、次の 1 点がこの試合を左右してしまうと判断すると、すかさず 2 回目のタイムを取る。その後、しっかりと抑え同点のままとした。結果的に、この回を最少失点で抑えたことが、勝利に繋がった。

6 回裏では、左打者の成田(和)選手の初球の空振りを見るや、すかさず右打者の高嶋選手を代打を送ったが、三振に終わる。ここでは、結果的に代打が凡退して無得点に終わってしまい、代打を送らずそのまま打たせることや、最初から代打に出すという選択肢もあったが、ここまでの龍谷の左腕池田投手と秋田商業の右打者と左打者の相性、成田(和)選手の初球の空振りから、右打者の高嶋選手の方が確率的に高いと判断したのではないか。結果的に無得点に終わってしまったが、太田監督の判断力の速さと大胆さの中にある計算された緻密さが感じられた。もちろん、この裏には豊富な経験と選手との信頼関係が必要不可欠であると思うが、受け身ではなく、積極的に仕掛けていかないと勝てないということを強く感じた。

### 【 龍谷 】

#### 7 回裏、1-1 の同点での守備

二死満塁で 4 番の小南選手を迎え、空振り三振に抑える。

#### 8 回裏、1-1 の同点での守備

一死二三塁で代打の小柳選手のスクイズを外し、三塁ランナーの生還を阻止した。

#### <考察>

7 回裏では、終盤で 1-1 の同点で二死満塁というこの上ないピンチを迎える。対する 4 番の小南選手には、1、2 打席目でいずれもライトへのヒットを打たれている。満塁で押し

出しも許されないが、厳しく攻めなければならず、カウント 2 ボール 1 ストライクとする。次のボールで、投手心理的には 3 ボールにはしたくないが、同時に打者は狙ってくるためストライクを取りに行くことも危険である。ここで、龍谷バッテリーは強気にインコース低めに直球を投げ込み、見逃しのストライクを取る。そして、次に外へ逃げるワンバウンドのシンカーを振らせ、三振に抑えた。川添捕手の強気のリードもさることながら、この場面でインコース低めに直球を投げ込める池田投手の制球力と精神力の高さに驚いた。

8 回裏では、一死二三塁で前の打席でヒットを放った近野選手の代打の小柳選手を迎える。終盤で 1 点も許されず、龍谷バッテリーは、スクイズを警戒し厳しいコースに 2 球投げ、2 ボールとする。ここも、投手心理的には 3 ボールにはしたくない場面であり、当然ストライクが欲しいところであるが、龍谷バッテリーは 3 球目を外す。案の定、秋田商業のサインはスクイズであり、小柳選手は空振りをし、三塁ランナーの生還を阻止した。スクイズを警戒する場面とはいえ、2 ボールから冷静に外すことができるバッテリーの危機管理能力の高さに感心した。おそらく、川添捕手は前の打席でヒットを打った打者に変えてまで出した代打の意図も頭にあり、必ずスクイズをしてくと腹をくくっていたのではないかと推測される。

負けはしたが、状況に応じて強気にコースを攻める制球力と精神力、冷静にピンチを脱する危機管理能力の高さが伝わり、甲子園のレベルの高さを実感した。



### 3. まとめ

#### ・6 回の攻防

今回観戦した 7 試合のうち 6 試合で 6 回に点が入るなど、試合が動いている。5 回終了後のグラウンド整備で空いた間をいかに使い、6 回を迎えられるかが重要である。そんな間の使い方注目していると、チームによってミーティングをする、キャッチボールや素振りなどで体を動かす、ベンチで体を休める、などさまざまだった。さすがに甲子園に出るようなチ

ームで間を空けた後、集中力を切らすチームはないが、実際に 6 回に試合が動いた 6 試合のうち、4 試合で 6 回に得点し、無失点に抑えたチームが勝っている（残り 1 試合は 3 点取って、2 点で抑えたチームが勝っている）。もちろん展開にもよるが、6 回の重要性を意識した間の使い方ができるかが、勝敗を左右するのかもしれない。

・迅速且つ適切な準備



甲子園では、準決勝まで 1 日 3、4 試合と過密日程で行われている。そのため、試合が終わってからすぐに次の試合のシートノックが始まる。テレビ中継では、試合後はインタビューやリプレイが流れ、ニュースなどを挟んで次の試合が放送されるので、そんなに感じなかったが、実際は試合間がめまぐるしいスピードで行われていたのに驚いた。とくに、シートノック中に

フェールゾーンを車で整備しているのには、驚愕した。

最後になりますが、今回このような研修にあたりご尽力くださった長野県高野連の皆様、お忙しい中、行動をともにしてくださった寺澤先生、巢山先生をはじめとする先生方には心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

今回の研修の成果を活かしつつ、長野県高野連の発展に少しでも貢献できるよう、日々精進していきます。



# 平成 27 年度甲子園指導者研修報告

阿智高校 小林勝男

## ○初めに

今回甲子園指導者研修に参加する機会をいただき、8月9日～10日の3日間、甲子園球場で試合を観戦してきた。私自身甲子園球場を訪れるのは高校生の時以来二度目であり、甲子園という存在に圧倒された当時の私とはまた違った目線で野球について考えることができた。

今回の研修では以下の試合を観戦させていただいた。

8月9日(日)	第3試合	滝川二(兵庫)	—	中越(新潟)
	第4試合	明豊(大分)	—	仙台育英(宮城)
8月10日(月)	第1試合	健大高崎(群馬)	—	寒川(香川)
	第2試合	岡山学芸館(岡山)	—	鳥羽(京都)
	第3試合	龍谷(佐賀)	—	秋田商(秋田)
8月11日(火)	第1試合	鳥取城北(鳥取)	—	鶴岡東(山形)
	第2試合	関東第一(東京都)	—	高岡商(富山)

上記の試合を観戦し、また他の先生方と情報交換する中で、感じたこと・考えたことをテーマごとに報告していく。

## ○試合前

甲子園では試合と試合との間のグラウンド整備の時間、つまり各チームがフィールドでのアップに割ける時間が地方大会に比べかなり短いと感じた。1日に4試合を消化する日もあるため仕方ないとはいえ、選手がキャッチボールをしているすぐ横でグラウンド整備がされている光景はかなり衝撃的だった。

また、試合前のシートノックでは多くの高校でボールを同時に複数個使ったボール回しがなされており、7分という限られた時間の中でいかに効率的にボールに触れる機会を作るか考えさせられた。内外野分かれた後連携をするという漠然としたノックの流れを、自チームの人数や特徴にあったものに変えていく必要があると感じた。

ボール回しについてさらに言えば、10日の第2試合に登場した鳥羽高校は捕球する際に身体をそこへ持って行くという動きが徹底されており、ただボールが飛んできたところの正面へ入るよりも捕球が次の送球につながっているように感じた。内野ゴロ等の捕球の際にも同じステップワークがなされており、試合中の動きを想定した練習として自チームでも徹底したいと思う。

## ○攻撃

見学した試合の中では仙台育英の打線が一番強烈だった。9日の第4試合で登場した仙台育英は初回からいきなり二塁打4本に本塁打1本という怒濤の5連打を放つ。明豊のエースの立ち上がりは端から見ていて決して悪いと言うことはなく、むしろ外の直球に対して引っ張りにいかず回転軸をやや外に傾け下半身と体幹をキープしたまま逆方向へ長打を打つ仙台育英の各打者のスイングがすばらしかった。体つきを見てもほとんどの選手が他の高校生より大きく、食育を含めた身体づくりの重要性を再認識した。

さらに、健大高崎を筆頭に走塁にかなり力を割くチームが多いということも感じた。甲子園では左の好投手の割合も多いのだが、バスターエンドランやセーフティスクイズといった足を絡める攻撃は近年どこの高校も引き出しとして持っているように思う。

采配に絡んで10日の第3試合で秋田商は7回まで8安打を放ちながら1点となり、監督の采配となかなかかみ合わない面が見られた。その後8回の裏無死一塁からバントをファールにした後ヒッティングに変えて結果二塁打となっているのだが、この采配が当たっていなければ試合はどうなったかわからない。信頼して結果を出せるならそれに越したことはないのだが、1点を争う場面ではただ打たせるというだけではなく、1つでも先の塁を狙う走塁と言うこともまだまだ自チームは発展途上であると感じた。

## ○守備

細かな連携プレーやサインプレー等の巧みさはあるものの、やはり地方大会レベルとは明らかに異なると感じたのは野手、特に内野手の肩の強さだ。仙台育英の遊撃手平沢選手を初め、甲子園常連校と呼ばれるような高校には俊敏な動きと肩の強さを兼ね備えた大型内野手が多いという印象を受けた。

また、彼らはセオリー通りなら前進守備をすることが多い場面においても、通常の守備位置より2、3歩前に出た程度で対応している様子が見受けられた。甲子園球場のグラウンドの質もあるだろうが、当然後ろに守っていればそれだけ守備範囲は広がるわけで野手、特に内野手の肩の強化というのは力をいれて取り組むべき点であると感じた。

外野からの送球をつなぐカットプレーにも甲子園ならではの内野手の難しさを感じた。いつもならとおる指示の声が甲子園の大歓声で聞こえなくなる場合があるのだ。指示の声がほとんどなくてもそれぞれの選手が的確に動けるほど反復練習を繰り返してきたのであろうチームもあれば、内野手が外野手の目印になりやすいようぐるぐる手を回しているチームもあった。いずれにせよ事前にプレーの確認をしておくことが甲子園ではいつも以上に重要になると思った。

## ○雰囲気

甲子園には独特の雰囲気があるとはよく言われることだが、今回の研修でそれは観客のムードに依るところが大きいと感じた。9日の第3試合の滝川二、10日の第2試合

の鳥羽などは地元のため応援の声も多く、それだけ他の地区の代表校にとってはプレッシャーに感じることも多いと思う。

観客の雰囲気的重要性を殊更感じたのが 11 日の第 2 試合関東第一対高岡商の試合である。この試合は初回先頭打者だった関東第一のオコエ選手が一塁強襲の二塁打を放つところから始まった。さらに 3 回にはオコエ選手が 1 イニングに 2 本の三塁打を放つなど 3 回を終えて 7 点差がつき、ワンサイドゲームになるかと思われた。観客の中にもオコエ選手目当てで来た人も多いようで、球場は関東第一を応援するような雰囲気に包まれた。しかし、4 回の表高岡商が連打などでチャンスを作ると、この雰囲気が少しずつ変わり始める。さらにセンターに飛んだ打球を処理したオコエ選手が三塁めがけて送球した際それが三塁側観客席へ飛び込む大暴投となってしまう。このプレーで甲子園の観衆の心は高岡商に移ってしまったように感じた。結果だけ見れば関東第一が辛勝するわけだが、一時 7 点差を追いつく粘りを見せた高岡商を支えたのは応援団を初めとする球場内の観客の雰囲気に依るところがかなり大きいと思う。

#### ○球場内の施設

今回の研修では試合の観戦だけではなく、甲子園球場の中にある出場校が使う施設等も見学させていただいた。試合後選手や監督がインタビューを受ける場所や試合前に選手がアップする場所、ベンチ内などなかなか見ることのできない場所を見学させていただいた。先ほども述べたが、試合間の時間が短いため初出場校などは前後の移動も含めあっという間で、球場職員の指示に従い急かされるように移動し、気づいたら試合が終わっているような印象を受けることも少なくないという。グラウンド整備にしてもそうだが、試合の運営に関わる職員の皆さんの行き届いた協力があったこそ、華々しい甲子園の舞台は成り立つということを感じた。

また、球場に立たせてもらった際には、バックネット裏で感じた以上に圧迫感を受けた。ここに立って何万人もの人に見られながらプレーをするということは並大抵のことではないのだと改めて感じた。ベンチで監督がいる場所から球場を眺めたりもしたが、自分がこの場所に立つにはまだまだ野球を勉強しなければならないと痛感した。

#### ○最後に

このような貴重な研修に参加する機会を与えてくださった長野県高野連の皆様には大変感謝しております。また、3 日間を通じて私たちのことを気遣ってくださった引率の寺澤先生、巢山先生には本当にお世話になりました。ありがとうございました。さらに一緒に研修に行った松田先生、栗原先生、春原先生と交わした話は私にとっても今後の指導の肥やしになることばかりでした。まだまだ若輩ではありますが、今回の研修で学んだことを糧として、少しでも長野県の高校野球界が発展していくことに貢献できればと思います。

# 甲子園研修 報告

長野県大町高等学校

野球部 顧問

春原ケンジ

私は今回の甲子園研修において、8月9日から8月11日までの三日間で計7試合観戦させてもらいました。自分自身が高校生の頃は選手として出場したことがありましたが、今回は指導者として、高野連にかかわる者としての視点で観戦し、新たな発見、感じたこと、学んだことが多く、非常に有意義な研修になりました。その中でも、特に感じたことを今回は大きく3つにまとめます。

## ① 試合展開の速さ

今回の研修でまず感じたことは試合展開の速さでした。試合時間の短縮は長野県大会でも言われていることですが、甲子園ではより徹底されていました。

具体的に短縮されている時間としては、まずは、試合と試合の間の時間がとにかく短くされていました。試合が終了すると勝利校の校歌演奏があり、スタンド挨拶、ベンチの片付け、グラウンド退場という流れで試合をしていたチームはグラウンドを出て行きます。スタンド挨拶が終わると次の試合のチームが入場して、ベンチの片付けとベンチの準備がほぼ同時に行われていました。ちなみにベンチ準備と片付けは補助員が中心となり、準備をしている最中にはグラウンド整備が行われ、終わり次第シートノックという流れでした。前の試合のチームが退場する頃にはシートノックが始まり、シートノックの最中は、フィールドグラウンドの整備も同時進行で行われ、とにかく無駄のない印象を強く持ちました。あの速い流れについていけないと試合前準備がただ慌しく過ぎてしまい、ベストな形で試合に入ることができないと考えられます。そのため、ベンチの準備の役割分担やグラウンド内での行動の速さなど、日ごろから意識し、また、あの流れをしっかりと理解しておかなければならないと強く感じました。

試合の中でも、インニング間の短縮によって試合時間の短縮の工夫が見られました。地区大会などでも徹底はされていることですが、インニングの先頭打者及び次打者の準備はグラウンド内で行い、守備につく際もベンチの選手が水分や帽子、グラブなどを持ち運び、キャッチャーの防具装着の位置も指定して、スムーズなインニング交代が行われていました。そのため、インニング間のミーティングはとても短く、具体的な指示などはなかなか出せないようなイメージを持ちました。ただ、インニング間の時間が長く設けられるインニングとして、2回の校歌演奏時は演奏が終わるまでは試合が再開しないので他のインニングよりも長く

時間が取れます。そのため、試合前の情報や、初回の攻撃で相手の情報をできるだけ探り、ある程度見抜き具体的な指示を出せるといい流れで試合が運べると感じました。実際に 2 回のイニング間は長く指示を出すチームが多かったように感じます。

しかし、攻守交替という視点で試合を見てみると、全力疾走をしているチームは、私が観てきた試合では 1 チームもありませんでした。おそらく、炎天下の中で試合が行われるため熱中症や痙攣のことを考えてのことだと考えられます。選手たちも大変な中で試合を行っているということを改めて痛感しました。そんな中、とても印象に残ったのが鳥羽高校対学芸館高校の試合の球審の方の励ましの声でした。イニングが終わるたびに守備につく側のチームのベンチに駆け寄り、急ぐことを促すような声ではなく、「熱いけどがんばろう」といった励ましを笑顔で、且つ、とても大きな声で発していたのには感動しました。選手もあれだけ大きな声で明るく審判さんに声をかけられたらがんばれるのではないかと感じました。ただ単純に試合を短縮するのではなく、選手も、審判も、気持ちよく試合ができる環境の大切さも改めて必要だと感じる場面でした。

## ② 打撃力の高さ

二つ目に感じたのが出場校の打撃力の高さです。最近の高校野球の傾向として、投手のレベルが非常に上がってきていると感じます。甲子園に出場するチームのエースはストレートが 140 キロを簡単に計測し、変化球も鋭いスライダーに加えて微妙に変化する球や鋭く落ちる縦の変化球などを投げる投手がほとんどです。そのようなレベルの高い投手に対しても振り負けることなく打ち返す打撃力に感心していました。

それを特に実感したのが研修一日目の第 4 試合で登場した仙台育英の打撃力でした。最終的には準優勝をしたチームで、打撃力に定評のあるチームでしたが評判通りの力強い打撃をしていました。とにかくファーストストライクから振っていく姿勢で、しかも合わせるようなスイングはなく常にフルスイングをしているのが印象に残っています。スイングの軌道であったり、タイミングの取り方など高度な技術を持ったうえでのバッティングでしたが、それ以前にとにかくフルスイングで積極的に振っていく姿勢というのが大きな特徴だと感じました。仙台育英に限らず他のチームでも打力を売りにするチームが増えていると感じます。そしてそれらのチームに共通することがファーストストライクからフルスイングをしていくという姿勢だと考えます。私が実際に観戦させてもらったチームで言うと仙台育英を筆頭に、中越高校、学芸館高校、鳥羽高校、鳥取城北、鶴岡東、関東一、高岡商業などのチームにその姿勢を感じました。レベルの高い投手だからこそ初球から振っていく、相手にもプレッシャーがかかり結果的にいい流れになる傾向が多かったのではと思います。長野県の高校野球を見ると、どうしても全国のチームに比べて打撃力の弱さを感じてしまいます。それは技術的な部分以前の問題で、振りにいく積極性、さらには合わ

せることなくフルスイングしていく形、というのが足りないからではないかと今回の研修では強く感じました。長野県の高校野球のレベルも上がってはいるものの、まだまだ全国では結果を出し切れていないという点で、打撃力という点での課題を克服していく必要があると考えます。

### ③ 野球人気

最後に感じたのが高校野球の根強い人気ということです。今回の選手権大会では世間の注目を集める選手の活躍が目立ちました。早稲田実業の清宮選手や関東一高のオコエ選手などが話題になり、そういった選手を見るために早朝から甲子園で並ぶお客さんがいる状況が連日のように報道され、研修最終日には関東一高対高岡商業の試合があり朝一で球場が満員になる状況でした。試合前のノックでは外野ノックを受けているオコエ選手に注目が集まり、彼の一挙手一投足に歓声があがっていました。実際に試合でも規格外の身体能力で大活躍をして観客を大いに湧かせていました。こうしたスター性を持った選手が高校生の段階から注目され、メディアに大きく取り上げられ高校野球の人気につながっているのではと感じました。

ただ、私が本当に高校野球の人気というものを感じたのはオコエ選手の試合ではなく、各代表校のアルプススタンドの様子や、球状全体の雰囲気でした。第一回大会出場校の鳥羽高校はアルプススタンドからファンがあふれ、外野席や内野席にまで大勢のお客さんが見られました。特に目立った注目選手がいるわけでもなかったですが、地域を代表する学校であり高校野球を通じて地域の人々が一つになっているという印象を感じました。他にも高岡商業の試合も、対戦相手にオコエ選手がいる関東一高との試合でしたが、観客の多くは高岡商業を応援している雰囲気がありました。そのような観点で観ると公立高校で甲子園に出場できれば毎回出場してくる強豪私立よりも大きな声援を受けているという印象を受けました。私自身も公立高校出身で何とか私立を倒し甲子園出場を目指していましたし、それに対する地元の人々の期待というのも感じていました。高校野球の根強い人気には、地元を代表する高校生たちの姿に対する地域の人たちの期待というのが切り離せないものだと強く感じました。

これから指導者を目指していくものとして、地域の人たちとの繋がりを大切にして子供たちと一緒に甲子園に出場できるチームを作っていきたいと感じる研修になりました。私自身の野球人生の糧にしていきたいと感じました。